

記念誌刊行によせて

飽 戸 弘
日本行動計量学会理事長

行動計量学会の設立第1回大会に参加したのが、もう35年前とのこと、感慨を禁じえない。

当時、通常の学会は2日間というのが常識であったが、本学会は4日間、連日、発表と真剣な議論が交わされ、すっかり度肝を抜かれたことだった。若い研究者の熱気が伝わってきたものだ。

この「若い」研究者というのは、年齢が若いということだけではない。なぜならそこには、今日われわれの学会の中心で活躍している、当時まさに若かった皆さんも参加していたが、それだけでなく、政治学、文化人類学、社会学、医学、統計学、心理学などの中堅、長老たちも、多数出席しておられた。重要なことはそれらすべての人たちが、新しい研究分野に、新しい研究方法に、新しい分析手法に、積極果敢に挑戦しているものばかり、と言う点が共通点であったから「若い！」学問の結集、と言う印象が強烈に残ったのだろう。

発表論文は、今から思うと玉石混交だったように思う。そうか、こんなことが計量できるのかと、でも、こんな分析をして良いのだろうか、時には感心し、時にはあきれ、しかしいずれも新しいチャレンジと言う点で、衝撃をうけたことだった。いままであまり計量分析や統計解析などを用いた研究の少なかった分野に、はじめて本格的計量・統計分析が適用された研究、それは高度な解析ではないが、それだけで画期的だったのだ。そして、上述のような実にさまざまな分野の研究者が、さまざまな主題を取り上げ、研究している、その多様さも、目を見張るものであった。こんな分野でこんな研究をしている人がいる！という新鮮な驚きの連続であった。

一言で言えば、あらゆる分野の研究者が、計量研究、統計解析、という共通項で結集した「マルティディスプレイナリー」な学会、というのが、私の第一印象であり、強烈な感動をもったものだ。

そして新しい現象の解析には、新しい調査方法、解析方法が、どんどん提案されて行った。数量化理論、多次元尺度解析、さまざまなシミュレーション分析など、レディメイドの分析手法をただ適用するのではなく、「オーダーメイドの分析手法」が、次々に開発されていった。特に、一対比較の数量化、MDA-OR、MDA-URなどは、最初の応用データを収集することができ、最初の解析結果を見ることができたのは、今も貴重な思い出である。

今日の行動計量学会は、研究分野も限られ少なくなった。一つ一つの研究のレベルは当時から比べたら大きく進歩しているのだろうが、小さくまとまっていて、安全運転ばかりで、どうも面白くない。かつてのあのやや野蛮なまでの活力が懐かしい。若い研究者諸君に、無理難題に挑戦し、玉砕寸前で、なんとか踏みとどまった、そんな元気の良い研究を見せてもらいたいものである。